

2018.11  
(公社)富山県薬剤師会  
広報誌

# とみ やく 富 薬

# 11号

第40巻  
No.352



カラスウリ *Trichosanthes cucumeroides* Maxim. (ウリ科 *Cucurbitaceae*)

**生 薬** オウカニン（王瓜仁） 秋、完熟した果実を割いて種子を取り出し、水洗後陽乾する。

**成 分** tricosanoic acid, inoleic acid, oleic acid, diaminopropionic acid, pipecolinic acidなど。

**効 能** 消炎、鎮咳、去痰薬として胸痛、便秘、咳嗽、心臓喘息、狭心症などに用いる。

生薬 オウカニン

元富山県薬事研究所  
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

## 〇〇表紙について〇〇



カラスウリ属 (*Trichosanthes*) は世界に約50種、国内に5種が自生します。その中で近畿以北に自生する種はカラスウリとキカラスウリ (*T. kiriowii* var. *japonica*) の2種だけで、当然北陸にはこの2種が共存し、両者を混同している節があります。カラスウリは東北地方南部から四国、九州や中国の長江以南、台湾に分布し、林縁など半日陰を好み、葉腋より巻きひげを出し絡みつくつる性草本です。茎と葉の表面に粗毛を密生し、葉は互生、柄を持ち心形で光沢は無く、普通3-5に浅裂します。花は雌雄異株で8-9月頃に日が暮れてから開き、夜明け前にしほむため観察はいたって困難です。強く甘い香りを放ち、比較的大きい純白の5裂した花冠の先が長く糸状に裂けて外側に房のように垂れ下がる様子から属学名の *Trichosanthes* (毛の花) が名づけられました。

この香りと色、形態が夜活動する蛾を呼び寄せ、花粉の媒介に多に役に立っています。秋に長さ5-7cmの楕円状で朱赤色に熟した果実を垂れ下げ、冬には落葉した樹間でよく見かけることができます。赤い果実が目立つことから「唐朱瓜」、唐から伝来した朱のように鮮やかな色をした瓜と名づけられたとも伝えられ、また「烏瓜」とも書き、カラスが食べるから、また逆に目立つのにカラスが見向きもしないから名づけられたともいわれています。カラスが食べているのを見かけたことはほとんど無いので後者の方が正しいように思えます。果実の中は種子と粘液質様のもので粘り気のある納豆状になっています。この果実は「王瓜」と言い、酒とすり潰してしもやけやひび、あかぎれに外用します。種子は中央に帯状の隆起がある目立った特徴をしていて、色々な名で呼ばれているようです。カマキリの頭のようなとも、大黒様のお顔のような、打ち出の小槌のようにも見え、財布の中に入れ福徳を願う縁起物にしています。また奴さんに見えるとか、結び文に見えるため「玉梓」と言い、手紙を梓の木に結び付けて運んだことから付いた名と言われています。根はダリヤやサツマイモの根の様に短い根茎部から数本の太い紡錘根を付けます。「王瓜根」、「土瓜根」と呼ばれ、発熱や熱性の便秘、黄疸、利尿に用いられる外、すり潰してデンプンを取り、葛粉のように用いたり、救荒食糧として保存します。

もう一種のキカラスウリは北海道奥尻島、本州、四国、九州、沖縄に分布する日本固有種で、草地や低木を好んで這い上がり、日向を好み、葉腋より巻きひげを出し絡みつくつる性多年草植物です。茎と葉は若い時は軟毛がありますが、すぐ無毛となり、葉は互生し、柄を持ち心形で光沢あり、普通3-5に浅裂します。花は雌雄異株で8-9月頃に夕暮れが近くなると開き、夜が明けてからもしばらくは開いています。強く甘い香りと10-20cmで5裂する白色の花冠、へりは糸状に細裂しますがカラスウリ程は長くありません。秋には長さ10cmの広楕円状で黄色に熟した果実(栝楼実)を垂れ下げます。この実は熟をさまし、渴きを潤し、胸の痛みを止めるとされています。種子(栝楼仁)は長楕円形から卵円形で扁平、長さ1.2cmで止渴、下熱、消腫薬、咽喉痛に応用します。根は栝楼根と言い、不整の円柱形に肥厚し、止渴、下熱、催乳、鎮咳に応用されます。また、根から取った澱粉は天瓜粉と言い小児の皮膚病やあせもに用います。

以上のように両者は相違点が多いのですが、昔から混同されていたようです。『本草和名』(918)に「王瓜 和名比佐久」、「栝楼 和名加良須宇利」と、比佐久は何を指しているか、「加良須宇利」もどの種を指しているかは不明です。江戸時代に入っても『多識編』(1612)に「栝楼 加良須布利、王瓜 比左古宇利今案ずるに可良須布利」とヒサゴウリとカラスウリが同じ物として扱われています。『大和本草』(1709)になって栝楼は「葉……毛なし、実の大きさ小瓜の如く。形まるくあり、長さあり、瓢黄色にして清し」とキカラスウリを指す表現になり、王瓜は「秋にいたりて熟す。紅色可愛。薬肆是を瓜蒌仁とすは非なり。王瓜の実は文をむすへるに似たり。故に玉つさと云う」とカラスウリを指すようになります。(村上守一 記)